

---

# バカとテストと天下統一

東条 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと天下統一

### 【NZコード】

N5908M

### 【作者名】

東条 優

### 【あらすじ】

文月学園に通う1年の桐山樹きりやまいつきはある日、学園長に呼び出され、他校と『試験召喚戦争』をすることに。そのために文月学園代表のチームを作ることになったが・・・。見事勝利し、願いをかなえてもらうことはできるのか?原作のキャラ、また他のアニメなどのキャラクターも登場します。

## プロローグ

『桐山樹君、春風優希さん。至急、学園長室まで来てください。』突然の放送。呼び出されたのは、俺こと桐山樹と幼なじみであり同じ高校、文月学園に通う一年の春風優希だった。

春原優希は金髪ツインテールの女の子である。

背は160cmぐらいの女の子ある。顔も整っていて可愛いと言わてもおかしくないのだが、何故か腰には本物の日本刀をぶら下げている危険なヤツである。

たまたま、一緒に昼飯を食べていたため、一緒に学園長室まで向かう。

「失礼します。」

中に入ると、学園長の藤堂カヲルもといババアがいた。

「今回アンタさんに来てもらつたのはちょっと頼み」と引き受けてもらいたくてね。』

そう言い、ババアは腕を組み、話し始めた。

「あんたら、『試験召喚システム』は知ってるだろ?」

「ああ。」

「その開発が進んで、他校でも『試験召喚システム』を取り入れられることが検討されているんだが・・・まだデータが足らない。そこで我々は、話し合いの末、他校の生徒と実際に『試験召喚戦争』をしてデータを得ることに決まったんだ。」

「データの収集も出来る。実戦を通して召喚獣の扱いに慣れる」と

も出来る。まさに一石二鳥だろ。そこであんたらには文月学園代表のチームを作つて欲しい。」

はつ？俺達はまだ1年だぞ。ろくに『試験召喚戦争』をしたことがないのに代表だ何て。

そう思つたのは、俺だけではなく、優希も同じようで、

「どうして、私達なんですか？」

と尋ねていた。

「春風が1年の学年首席であり、桐山が文月学園に2人しかいない『観察処分者』だからだよ。」

『観察処分者』とは学生生活を嘗む上で問題のある生徒に課せられる処分。基本的には教師の雑用係でありバカの代名詞、およびバカに対する見せしめとも言える称号のことである。そんな俺がどうして代表なんかに。

「そうこうことですか、学園長。」

何かに気づいた様子の優希。

「こんなやつにはなりたくないと樹を見せしめにすることでチームの士気をあげようとするわけですね。」

やばい、泣きそう。この女、人を馬鹿にしてすぎだ。確かに俺は馬鹿だけど。

「まあ、そんなとこだよ。（本当は、いつ日本刀を抜いて人殺しに走るかもしれない春風を止めるために桐山を用意した。）」

学園長が言った。

「なあにただでとは言わない。そうだな、参加する学校全部に勝利する」ことが出来たら、なんでも願いを叶えてやるつ。」

「マジー？』

「出来る範囲でならな。」

「そういう分けでメンバーを揃えておくれよ。50人だ。この学校の生徒なら誰でも良いぞ。これは名簿だ。横には備考としていろいろ書いてあるから、参考にしておくれよ。」  
こうしてチームを作ることになった。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたか？  
バカとテストと召喚獣の一次創作は初めてなので暖かい目で見守つ  
てください。  
次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第1話「Aクラスの2人」

「誰を仲間にするんだ？」  
隣を歩く優希に言った。

彼女は右手に名簿を持ち、左手には先ほど購買部で買つてきた午前の紅茶を飲みながら言う。

「とりあえず、2年生の学年主席の霧島翔子先輩、久保利光とかいうやつは仲間に入れたいわね。」

あの人か。霧島翔子、一年の中でも結構話題になつた人だ。  
男子からの告白は全て断つており、一部では同性愛者ではないかとの噂がある女性だ。

俺のクラスの何人かも告つて玉砕していた。

久保利光。名簿にはAクラス、学年次席と書いてある。  
まあ学年次席なら頭はいいのだろう。

「じゃあ、Aクラスに行くか。」

優希はその提案にのり、Aクラスへ向かつた。

Aクラスの前で待つこと数分、たまたま通りかかった先輩に霧島先輩と久保先輩を呼んでもらう。  
やってきた2人の先輩。

霧島先輩は、長い黒髪が印象的で、神々しささえ漂うその美しさは思わず見とれてしまう。

久保先輩は、メガネをかけており、典型的なガリ勉男子の風貌である。

「・・・何か用?」

霧島先輩が口を開く。

俺達はチームを作らないといけないことを説明し、そのメンバーに入つてもえいか頼んだ。

暫く悩んだ後、

「・・・雄一が入るなら良い。」

「僕も吉井君がいるなら入らせてもうつよ。」

それだけを言うと2人はAクラスに戻つていった。

「誰? 雄一と吉井って! ?」

仲間になるのを断られたせいで不機嫌なご様子の優希。待て待て、腰の日本刀を抜こうとするな。

えつと・・・あつたあつた。

坂本雄一。さかもとゆうじ Fクラス代表。集団の統率力に優れている。

吉井明久。

よしこいあきひさ Fクラス所属。『観察処分者』。

この人がもう一人の俺と同じ『観察処分者』。

このことを伝えるとますます不機嫌になる優希。

日本刀は半分ほど鞘から出ている。

マズイ、俺はそう思いポケットに入れてあつたイチゴ味の飴を無理やり、優希の口に入れる。

すると優希は今まで不機嫌だったのに落ち着いていた。

「ふう〜。」

俺はホツと一息吐き、安心する。

彼女はイライラすると見境なく人やら物を斬り始める。だが甘いものを口に入れてやると落ち着くのだ。

「Fクラスに行こうか？」

「いえ、その前に・・・。」

とりあえず機嫌を良くした優希は不敵な笑みを浮かべ、職員室にようつてからFクラスへ向かった。

別にFクラスなら良いでしょ、と優希は堂々とFクラスの中へ入つていいく。

俺もその後に続いていく。

Fクラスの生徒達（ほぼ男）が俺らを見て怪訝な表情を浮かべる。つうか男ばっかじやねえか。むさ苦しそう。

そもそもこりは教室なのか？と思いつくくらい悲惨だった。

みかん箱&ござしかない。しかもかなり不衛生で埃も舞つていて。下位クラスに行くほど設備は悪くなつていくと聞いたがまさかこれほどとは。

俺も今から勉強しようかな・・・。

そんな俺の不安をよそに優希は堂々と教壇に上がり、言った。

「私のパンツが見たかつたら戦つて勝ちなさい。」

ただ、それだけ言うと、職員室からつれてきた、保健体育の大島先生に召喚フィールドを開いてもらつように言った。

それだけなのに、

「よつしゃ――――！」

「うおおおおお――！」

「殺せ！―殺せ！―」

異常なまでにFクラスの男子生徒はやる気を満ち溢れさせていた。

「勝負がついたら教えて。」

優希はそれだけいうと教壇にしゃがみ、寝始めた。

次々と召喚される召喚獣たち。さすがFクラス。装備がしょぼすぎ  
る。

俺あまり人の事、言えないが。

突然、悲鳴が聞こえた。

「ムツツリー二だー！」

「ヤツを止めろおーー！」

ムツツリー二？まさか、文月学園男子生徒ならほんと知っている  
ムツツリ商会の経営者か。

声がした方を振り向くと、そこには忍者の格好をした召喚獣が物凄  
い速さで他の召喚獣を倒していく。

「・・・まだまだ。」

そして、時間は立ち、そこには無残に戦場で散つていったFクラス  
の男子生徒の死体が転がっていた（本当は死んでいません）。

チーム編成編 第1話「Aクラスの2人」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第2話「マグニマーと凶暴な幼なじみ」

問 以下の問いに答えなさい

『調理のために火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めるとき問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎に掛けると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目といつ引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（すこく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

桐山樹の答え

『問題点・・・実験をする人が調理がへたくそという点。

合金の例・・・超合金』

## 教師の「メント

そこも問題ではありません。超合金つて、ガンムですか。

「優希、起きる。勝負がついたぞ。」

寝ていた金髪ツインテールの少女の頭を小突き、起にじしてやる。

「・・・もう決着ついたの〜？」

眠たい目をこすりながら言った。

生き残ったのはムツツリーーー」と土屋康太。  
少しそうい外見である。

「・・・パンツ。」

やや控えめに言つているが、その目は血走つてこる。  
口をも噂に聞いていた通りのものだ。

だが、そんなムツツリーーーに対し、優希は、

「何の話？そんなこと言つた覚えはないんだけど。」

と嘘をついた。言つてたよ、優希。

だが優希は目で黙つてろ、と合図をしてきた。怖い怖い。

「・・・言つた。」

「証拠もあるつてこいつの？」

「・・・証拠ならある。」

そつ言い、ムツツリーは小型の録音機を取り出したが、優希が見  
るも止まらぬ速さで木つ端微塵に切り裂く。

「他に証拠はある？」

「・・・つう！？」

その瞬間、ムツツリーが膝を突く。  
涙目になりますよ。

「2年のFクラスに保健体育のスペシャリストがいるって聞いてた  
けど本物の様ね。ねえ、君、私の仲間にならない。」  
手を差し伸べる優希。先ほどまでの悪魔のよつな感じからは考えら  
れないほどの笑顔を向ける。

「・・・仲間になる。」

その手を取り、起き上がるムツツリー。単純すぎる。

ムツツリーを見事に仲間に出来たところで、ガラガラと教室のド  
アが開いた。

「つておいおい、何だこの有り様は！？」  
「酷い事になつてあるのぉ・・・。」

「アキ、大丈夫！？」

「明久君、何があつたんですか！？」

男1人に女3人（一人は何故か爺言葉）が入ってきた。

「瑞希先輩！？」

突然、驚きの声を上げる優希。

「ゆつちゃん？」

その言葉にピンク色のウェーブのかかった長い髪の女の子が振り向  
いていった。

む、胸がすごい！…じゃなくて・・・名簿を見る。瑞希、瑞希つと  
あつた。

姫路瑞希。<sup>ひめじみずき</sup>Fクラス。だが本来の学力は学年次席レベル。

「姫路知り合いか？」

180cm強の長身と精悍な顔立ちを持つ男が姫路先輩に言った。

だがその様子を見て、ワナワナと体を震わせる少女がいた。優希だ。

「アンタが・・・」

「どうした？」

「ヤバイ。みんなこの教室から出るんだ！！」

優希の様子を見て、叫ぶ俺。

その様子に、皆は驚いたが、すぐに教室から出て行ってくれた。ホツと一息つくのもつかの間、再び視線を優希に戻すと彼女は日本刀を完全に鞘から抜いていた。

飴はつと、3つか。ちゃんと口に入ってくれよ。

まだフィールドは展開してある。

「試<sup>サモソ</sup>獣召喚！！」

そう叫ぶと、小さな召喚獣が現れた。両手にはトンファが装着されており、半そで半ズボンの格好である。優希の方は怒りで興奮しているため、召喚することはないだろう。

召喚されると俺は確実に負けるだろうが。

俺は飴を一つ掴み、優希の背後に回るように突っ込む。それと同時に召喚獣を優希に正面から突っ込ませる。

トンファと日本刀がぶつかり火花が飛び散る。

腕に痛みが走る。たとえ1桁の点数でも「コラ並みのパワーを持つ召喚獣でも優希と互角とは。

そして召喚獣の点数が表示される。

保健体育 4点

勉強しどけば良かつた・・・。

後悔が頭をよぎるが、すぐに片隅に追いやり、召喚獣に気を取られている隙にメロン味の飴を口に入れると、電池切れのロボットのように動かなくなり、動くようになつた時には落ち着いていた。

「中に入つても大丈夫です。」

廊下に非難していた姫路先輩達に声を掛ける。

彼らは恐る恐る教室に入るが、優希が落ち着いているのを見ると肩の力を抜いた。

「助けてくれて感謝する。」

先ほどの男が代表でお礼を言った。

「いや、気にしなくていいです。それより、坂本雄一先輩と吉井明久先輩を探してくるんですが。」

「坂本雄一は俺だが。」

目の前の男がそう言った。

## チーム編成編 第2話「ムッシュコーナーと凶暴な幼なじみ」（後書き）

いかがでしたか？

今回は皆さんにアイディアを出して欲しいと思います。

それは、この作品と共に演せるアニメ、漫画などについてです。  
条件としてはそのアニメが高校、もしくは私立の中学校が舞台となつ  
ていることです。

アイディアは感想のところか、活動報告にコメントしていただくな  
どどちらかでお願いします。

皆様のアイディア待つてます。

それでは、次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第3話「Fクラスが仲間入り」

田の前に立てる男は自分のことを坂本雄一と名乗った。

「じゃあ、吉井先輩は？」

「ああ、明久か。多分この辺に、おつ、いたいた。」

坂本先輩は吉井先輩を見つけたらしく、燃え尽きたFクラスの男供のなかから、一人の少年を引き擦り出した。

「起きろ、明久。」

ペシペシと頬を叩くがなかなか目を覚まさない。

「早く起こしてよ。」

不機嫌になってきた優希。

「仕方ない・・・。明久、田の前に力口リーが・・・。」

「力口リーーーー！」

坂本先輩の力口リーの言葉に反応し、田を覚ます吉井先輩。

「雄一、力口リーはーーー？」

「なもん、ねえよ。」

その言葉を聴いた瞬間、落胆する吉井先輩。

「・・・で、俺らに何のようだ?」

坂本先輩が話を戻してくれた。

学園長から言われたことをそのまま伝える俺と優希。

「あのババアか。何か企んでるな。」

「雄一、ババアじゃないよ。クソババアだよ。」

学園長がいな事無いことに暴言を吐きまくる坂本先輩達。

「で、仲間になるのならないの？」

「やることもないし、別にかまわんが。」

「僕も大丈夫だよ。でも、僕みたいな『観察処分者』を仲間に入れようとするなんて変わってるね。」

吉井先輩が苦笑しながら言う。

「あたしだって、入れたくて入れたんじゃないわよ。」

「久保先輩からのご指名だったからな。」

優希はとっさに自分は入れたくないことを言い、俺が久保先輩のことを受け加える。

「久保君が……？」

吉井先輩は分けがわからないといった様子だが、坂本先輩達は可哀想な物を見る目で吉井先輩を見ていた。

「明久、お前も苦労してんだな。」

「……ご愁傷様。」

「何で、そうなるの！？」

皆の態度に驚く吉井先輩。

「とにかく2人とも入ってくれるんですよね。」

「ああ、あと姫路に秀吉、島田も入れたほうが良いと思つぞ。」

坂本先輩がそう提案した。

だが、優希は不信感を顔に出して、

「瑞希先輩なら私の中学の先輩だから頭いいのは分かるけど、後の2人は何かの役に立つの？」

と問いただしていた。

「秀吉は声帯模写が得意だから何か役に立つと思つよ。それに「稀代の美少女」だから士氣も上がると思うよ。」

吉井先輩が説明するが、その説明に異を唱える女の子がいた。

「ワシは男じや。」

先ほどの爺言葉を話す美少女だった。

名簿を見てみる。

木下秀吉。<sup>きのしたひでよし</sup>「クラス。性別欄に“秀吉”と書かれていた。

女性ですよね？本人、男とかいつてますけど。

「ワシは残念じや・・・。」

疲れたようにそう言つ木下さん。

「島田は数学が得意だから役に立つと思つぞ。」

坂本先輩が言った。

名簿を見る。島田美波。<sup>しまだみなみ</sup>「この絶壁って何ですか？」

「吉井先輩。」この絶壁って何ですか？」

「それはね、美波は胸が無・・・。」

バキッ・・・。

「美波・・・そつちに・・・腕の関節は・・・曲がらない・・・。」

吉井先輩の腕の関節をとつてているのは、元気そうなポニーテールの女の子だった。

吉井先輩の腕が変色してますよ。

「まあ、いいわ。じゃあAクラスに向かいましょ。」

「先に行ってくれ。俺は学園長に用がある。」

それだけを言い、坂本先輩はFクラスを出て行つた。

そして、残った俺と優希と姫路先輩と吉井先輩、ムツツリー二、木下さん、島田先輩の7人はAクラスに向かつた。

「異議なしです。」

Aクラスに向かい、霧島先輩と久保先輩に、吉井先輩と坂本先輩を仲間に出来たことを伝えると、すんなり仲間に入ってくれた。

「代表。あれあれ、ムツツリーー君もいたのかい。」

▲クラスから出てきたベリーショートでボーアッシュな容姿の女の子が出てきた。

「見かけない顔ぶれもいるみたいだねえ。」

俺と優希を見て、言う立藤先輩。

一ではでは、出血大サービス。

か。そう言って、チラリと自分のスカートをめくる工藤先輩。スバツツ

その瞬間、ムツツリーーの鼻から出血が起こる。

そんな2人をよそに霧島先輩と優希が話している。

・・・愛子は戦力になる

「仲間にしましょう。」

そんなわけで、工藤愛子が仲間に加わった。

## チーム編成編 第3話「Fクラスが仲間入り」（後書き）

いかがでしたか？  
まだまだアイディア募集中です。  
次回もお楽しみに。

チーム編成編 第4話「坂本雄一の考え方」（前書き）

今回は坂本雄一視点で話が進みます。

## チーム編成編 第4話「坂本雄一の考え方」

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまつこと
- （2）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喻え』

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り
- （2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

『正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。』

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』
- 教師のコメント
- 『シユールな光景ですね。』

吉井明久の答え

- 『（2）泣きつ面蹴つたり』
- 教師のコメント
- 『君は鬼ですか。』

桐山樹の答え

- 『（2）傷口に日本刀』
- 教師のコメント
- 『物凄いグロテスクな光景ですね。』

樹たちがAクラスにいた頃、学園長室では。

「ババア、どういつもりだ？」

「なんなんだい。いきなり入つてくるなり。本当に失礼なガキどもだねえ。」

そこには坂本雄二と長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長がいた。

「いきなり、1年に代表チームなんてもんを作らせやがって。おまけに話を聞くと他校と『試験召喚戦争』をやるらしいじゃないか。何が目的だ、ババア長。」

「ババア長言うんじゃない。目的も何もあんたに話すこと無いね。帰んな。」このウスノロ。

「そろはいかねえな。俺も代表チームに入ることになつてるからな。いいのか、俺が他校の前でこの学校の恥をさらしても。」

「汚い手を使つじやないかい。」

「お互い様だろ。」

苦虫を噛むような表情の学園長と、不敵な笑みを浮かべる坂本雄二。

「わかつたよ。教えてやろ。田的は、他校への『試験召喚システム』の導入だよ。とはいってもまだ実験段階。信用も得られていない。そこで他校にも試してもらい、実際に見てもらう。『百聞は一見にしかず』っていうだろ？ アンタみたいな馬鹿には分からないだろうが。」

「そして、他校に導入してもうのを促すとこづことか？」

「そういうことだね。まあ、アンタにもただでやれとは言わない。全試合勝てば、一つ願いを叶えてやるわ。」

「了解だ。」

学園長室を出て行く坂本雄一。

「まったく・・・とんでもないヤツを仲間に入れよって・・・。」

藤堂力ヲルは呟いた。

雄一サイド

廊下を歩きながら、俺は今後のことを考えていた。

あのババアめ。まあいい。俺も俺で使えそうなやつを探しておくか。  
あいつらはAクラスに行くとか言ってたな。

ということは久保、翔子、あたりは仲間にしているのだろうな。  
もしかしたら、工藤も可能性がある。

つて、翔子もか・・・。ヤバイ冷や汗が出て来た。

まあ今はそんなことを考えている場合ではないな。

とりあえず一人は俺が選ぼう。後の余ったのは召喚獣の扱いに慣れた俺達のクラスのやつを入れればいいだろ。う。

この考えにまとまり、とりあえず2人を仲間に誘いに行くことにしよう。

俺はいま2年Dクラスの前に来ている。  
そして俺はドアをノックし中に入った。

「清水はいるか？」

その言葉にぎわめき立つDクラスの生徒達。

「何かようですか？」

教室の後ろの方から歩いてくる女。

縦ロールをツインテールにしているそいつは俺が仲間こじみうと思つていてる清水美春だ。

盗撮や盗聴が得意だが、Fクラスの島田のことが大好きな同性愛者ということもあり、仲間にするには不向きと思われがちだがそういうでない。

使い方しだいではこれ以上無いほどの影響力を發揮できると俺は考えている。

「清水、島田と一緒にいたいと思わないか？」

「詳しく聞かせるです。」

俺は他校との試合の話しを言い、島田がチームに加わっていくこと伝えた。

そして仲間になるなら、一緒に行動させてやることを条件として提案した。

「分かりました。美春、仲間になります。ああこれでお姉さまのペッタンコな胸が私のものに・・・」

すっかり上機嫌になつてゐる清水を連れ、明久たちの下へ向かつた。

チーム編成編 第4話「坂本雄一の考え方」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第5話「動き出す者達」

「雄一、あれ清水さんも。」

戻ってきた坂本先輩は、縦ロールをツインテールにした女の子を連れきていた。

「桐山たちは知らなかつたな。こいつはロクラスの清水美春だ。」

坂本先輩が紹介するや否や、清水先輩は島田先輩に飛びつき、「お姉さまのお胸は水平線のようにペッタンコですうーーー！」と言つていた。

「美春！..離れなさいよ。」

「嫌です！..美春はお姉さまと一緒にすつーーー！」

嫌がる島田先輩をよそに、清水先輩はもつと密着し始める。目の前で繰り広げられる同性愛者を前に、俺らはただ呆然と見ていた。

「で、仲間集めはどうなんだ？」

「今のところメンバーは、私に、樹、吉井先輩、ムツツリー二先輩に、瑞希先輩、島田先輩、木下先輩、霧島先輩、久保先輩、工藤先輩、清水先輩、それにアンタの計12名よ。」

坂本先輩の質問に、対し優希が答える。

「残りのメンバーの予定は？」

「今のところ無しつていったところね。」

「だったら俺達Fクラスをメンバーに入れて欲しい。」

「なんでよーー？」

坂本先輩の言葉に、優希は疑問の声を上げる。

「お前は知らないかもしぬないが、2年の中で、一番、召喚獣の扱いに慣れてるのは、Fクラスだ。Aクラスは点数は高いが、扱いには慣れていない。嘘だと思うなら、翔子に聞いてみろ。」

「……雄二の言つてることは本当。」

「それに今3年は受験勉強で忙しい。1年はうくじ『試験召喚戦争』をしたことがないだろ?」

「ええ、そうだけど……。」

だがどこか納得し切れていない様子の優希。

「まあ、いいんじやないのか?」

俺は優希の肩に手を乗せ言つ。

「それにFクラスだつたら、扱いやさしいだろ?」

「それもそうね。」

そんな分けで、文月学園代表チームが完成した。

今回の参加校の条件は高校・もしくは私立の中学校ということになつていてる。

また、他の学校同士で連携するのもありとなつていてる。  
その頃、他校でも着々と代表チームが出来ていた。

・・・光坂高校・・・

卷之三

「そうみたいだな。」

「あの有名な『試験召喚戦争』が出来るんですから、楽しみで仕方

数十名の生徒が教室に集まり、エンジンを組んでいる。

「おるからじな勝つぞ、あんや。」

፩፻፭፻—፻፭፻

# 私立桜ヶ丘女子高等学校

「波女童が、『試験』戦争を受ける我が校の代表になりました。

校長が壇上に上がった、50名の生徒を見て言つ。

「般若波羅蜜多經」

校長の声で  
パチパチパチと拍手がたくさんの中、生徒によつて巻き起

壇上にはあの有名な軽音部のメンバーの姿もあつた。

・・・学園都市・・・

「いいのか?ビリビリ、お前が俺らみたいな弱小高校と手を組んでも。」

「私たちまで仲間に加えてもらつて。」

「ビリビリ言つた。佐天さんも気にしないで。私が仲間に入れたいと思ったから入つて、もらつたんだから。」

「そういうわけで、学園都市代表チーム結成を祝つて何か食べにいかない?」

・・・死後野高校・・・

「『試験召喚戦争』おもしろそつじゃない。」

何故か、校長室の椅子に深々と座つている、学生服を着た女生徒が言った。

「でもよお、ゆりっぺ。俺らが勝てんのか?」

「僕らは馬鹿ばっかなんだよ。どうするの、ゆりっぺ?」

「ゆりっぺさんね」これから勝てるための作戦を考えるとしてするわ。

「

・・・碧陽学園・・・

「生徒会の知名度を上げるチャンスよ。」

「俺のハーレム増員ですね、会長。」

「ハーレムじゃないわよ、キー君。」

「俺にとつては他校との交流＝ハーレム増員ですから。  
「どうでもいい情報ね。」

そして、今日も碧陽学園生徒会は駄弁るのであつた。

チーム編成編 第5話「動き出す者達」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第6話「試召戦帝ヒロ」

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly』  
y・

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』  
教師のコメント

『正解です。きちんと勉強していますね。』

桐山樹の答え

『これは本棚が私の祖母を結構使つていました。』  
教師のコメント

『まず、ありえない光景だと気づいてください。』

土屋康太の答え

『これは  
教師のコメント  
『訳せたのはThisだけですか。』』

吉井明久の答え

『　　「　　×』

教師のコメント

『できれば地球上の言語で。』

## 学園長室

「学園長、チームが出来ました。」

俺と優希は学園長にチームメンバーの名簿を渡す。

「ほお～、何人かAクラスがいるようだが、ほとんどFクラスのようじゃないか。ほんとに良いのかい？」

「ええ、大丈夫ですよ。」

学園長の心配して言つたであらうつ確認に、優希は凜とした声で返答した。

「なら良い。じゃあこれが今回の『試験召喚戦争』のルールだよ。少しルールが変わっているから田を通しておくんだね。」

学園長はそういう、プリントを3枚ほど渡してくれる。

なになに・・・

一、原則として学園毎の代表チーム同士の戦いとする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。  
二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目においてもつとも近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を

受講する義務を負つ。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度も回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼びだしたにもかかわらず召喚を行わなかつた場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦争の勝敗は、チーム代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝負に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

といつ、いつもどおりのルールに加え、

1チーム50人とする。また試験会場は文月学園で行われる。  
白金の腕輪を使ってもかまわない。

全試合を勝ち抜けば、豪華賞品をもらえる。

ただし負けた時点で、参加資格を失う。

また学年ごとによつて受けるテストの内容は違うが、難易度はほぼ同じものである。

以上のルールが付け加えられていた。

「一週間後の土曜日に最初の『試召戦争』がある。そういうことだから今から精々、作戦でも考えておくんだね。」

学園長はそれだけ言つと、自分の仕事をし始めた。

「失礼しました。」

俺達は、学園長室から出ると、優希の提案でAクラスの面々と作戦を立てよう、ということになつたのだが、

「・・・そういうのは雄一が得意。」

「確かに彼の方が作戦を考えることは秀でている。」

「ボクも異論はないよ。」

と3人は坂本先輩に作戦を任せる様子。

そんなわけで作戦は坂本先輩が引き受けことになった。

チーム編成編 第6話「試召戦帝ヒセ」（後編）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## チーム編成編 第7話「テスト勉強は大事」

今日は水曜日。

雲ひとつ無い青空だ。

こうじう時に屋上で空を見上げながら、食べる昼食は最高に上手い。  
・・・だろうな。

俺は目の前の光景を見て泣きそうになつた。

君達はお弁当派だらうか？それとも学食派だらうか？

俺はお弁当派だ。いつものように母親から弁当を受け取り、いつものように授業も終わり、やつた昼飯だと思つて屋上に来て、弁当箱を開けた。

空っぽの中身、お皿は買つてね、と裏に書かれたレシートと500円玉が一緒に蓋の内側に貼り付けてあつた。いまから、購買にいつも何も残つていなかろう。

ヤバイ、泣きそつ。

そんなこと知らずに隣で、自分のお弁当を美味しそうに食べる優希。美味そうだな。優希のお弁当は、定番のからあげや玉子焼き、ロコモコに、色合いとしてプチトマトやグリーンピースや、可愛らしくウサギの形にくつ貫いたかまぼことかが女の子のお弁当って感じがする。

じつと見ていたのに気づいた優希は、

「樹、お弁当は？」  
「・・・。」

そう聞いてきたので、無言で自分の弁当を見せた。

優希は可哀想なものでも見るよつた目で見てくる。

「これあげるわよ。」

そう言って、俺の弁当箱に、玉子焼きとからあげとフチマトをくれた。

「ありがとう。」

生まれて初めて、あの悪魔としか思えなかつた優希が天使に見える。もうちつた玉子焼きを口に運ぶ。甘い。

昼飯を食べ終えると、隣に座つてゐる優希が口を開いた。

「樹、食べ物あげたんだから、勉強するわよ。」

突然の彼女の提案、といふか命令に俺は拒否することは許されないだろうなと思い、頷くしかなかつた。

放課後・・・。

「さあ、行くわよ。」

帰りのホームルームが終わるなり、俺の席にやつてきた優希。俺と優希は同じクラスである。

「分かつたよ。」

俺は荷物を鞄に入れる。部活動に向かう生徒達が教室を出て行くのが視界に入つてくる。

ちなみに、俺も優希も帰宅部である。だって、部活とかめんじくさいし。

今日の勉強場所は俺の家。

優希の家は明日、最終日は『試合戦争』の点数補充のためテストを受けることになつてゐる。

えつ？年頃の男女が2人きりって状況はマズイんじゃないかって。心配御無用だ。俺は優希にそんな気は起こさないし、万が一起こしたとしても、死ぬのは俺だから。

日本刀でザックリやられて、あの世へ一直線だから。そんなわけで、俺はまだ死にたくないので、そんな気は起こないと、今ここに誓いましょう。

と、いふことで俺の家で勉強会をすることになった。

「ただいま。」

「お邪魔します。」

玄関で靴を脱ぎ、2階の俺の部屋へ行く。

俺の部屋のドアノブに手を掛けた時、向かいの部屋のドアが開いた。「お兄ちゃん、帰つてたんだ。あ、春風お姉ちゃん、こんにちは。」黒髪を肩のところで切りそろえた、まだ顔に幼さが残る少女が言った。

コイツは俺の妹の桐山陽菜。

「こんにちは、陽菜ちゃん。」

優希が挨拶を返す。

「じゃあ、私、出かけるから。2人ともいじゆつくつ。」

そう言い残し、陽菜が下に下りていった。

「入つてよ。」

部屋の真ん中にあるテーブルに座る。

「じゃあ、まずは数学からしましょつ。」

勉強会が始まった。

勉強を始めて、約3時間がたつた頃、  
「そろそろ私、帰るわね。」  
と優希が言った。時間を見てみるともうすぐ7時になると悟りだつた。

「送つていこうか？」

俺の家から優希の家まで、近いとはいって、女子が夜道を一人で歩く  
といつのは物騒なものである。

「ありがとう。じゃあ、そうしてもううわ。」

優希は自分の荷物をまとめながら言った。

「ねえ、樹。」

「どうした？」

夜道を歩いていると、優希が話しかけてきた。

「学園長が言つてた、全部勝てば、願いを叶えてくれるって言つた  
けど、何をお願いするの？」

「優希はどうするんだ？」

「・・・内緒。」

「俺も内緒だ。」

お互いに言つた数秒後、顔を見合わせて笑いあつた。

## チーム編成編 第7話「テスト勉強は大事」（後書き）

いかがでしたか？

この話でチーム編成編は終わりです。

物語としては始まつたばかりですのでこれからもお付き合いください。

次回もお楽しみに。

## 登場人物／文月学園

桐山樹  
きりやまつぎ

この物語の主人公

文月学園高等部1年

文月学園に2人しかいない『観察処分者』の一人。

勉強は得意じゃないが、とつさの判断力はあるようだ。

普段は頼りないが、いざとなつたら頼りになるタイプ。春風優希の暴走時にはいつも止めに入っている。

春風優希とは幼なじみである。

春風優希  
はるかぜ ゆき

この物語のメインヒロイン

文月学園高等部1年の学年首席。

桐山樹とは幼なじみ。

金髪ツインテールの女の子である。

背は160cmぐらい。顔も整っていて可愛いと言われてもおかしくないのだが、何故か腰には本物の日本刀をぶら下げている危険なヤツである。

不機嫌になると、周囲のものを斬りたがるが、甘いものを口に入れられると落ち着く。

吉井明久  
よしい あきひさ

原作の主人公だが、今作ではサブキャラ。

文月学園2年Fクラス。

文月学園に2人しかいない『観察処分者』の一人。

自己保身の為にはかなり悪知恵が働き不意打ちなどの卑怯な手段も躊躇わないと、良くも悪くもバカ正直で他人のために真剣に怒れるまっすぐな心根の持ち主である。

得意科目は『日本史』と『世界史』。

坂本雄一  
さかもと ゆういち

文月学園2年Fクラスの代表。

180cm強の長身と精悍な顔立ちを持つ不良少年。  
集団の統率力に優れている。

基本的に己の欲望や保身以外には行動しない無気力な性格だが、一度やる気を起こせば、試合戦争その他に様々な知略・謀略を巡らし、必要があれば自らが動いて計略を成功させるほどの頭脳の持ち主。

姫路瑞希  
ひめじ みずき

原作のメインヒロイン。

文月学園2年Fクラス。

身体は弱いが、発育は良好で胸のサイズは目測でFカップの美少女。本来の学力は学年次席の才女。振り分け試験の時に高熱を出して途中退席してしまい、テストが全て無得点となつたためFクラス所属となつた。

島田美波  
しまだ みなみ

文月学園2年Fクラス。

ドイツ育ちの帰国子女。

勝気な目と髪に大きな黄色いリボンで束ねられたボニーテールがトレードマーク、美形で長身・美脚のモデル体型だが胸は絶壁という女の子。

得意科目は『数学』。苦手科目は『古典』。

土屋康太  
つちや こうた

文月学園2年Fクラス。

情報操作と隠密行動が得意。

並外れたスケベ心とそれを隠そうとするひたむきな姿から『ムツツ

リーニー』と呼ばれている。

吉井明久と同等のバカだが性に関する知識だけは豊富かつ貪欲で、しかし実際には妄想ですら致死レベルの鼻血を噴くほどウブな少年である。

得意科目は『保健体育』。それ以外は壊滅的。

木下秀吉  
きのしたひでよし

文月学園2年Fクラス。

特技は声帯模写。

「稀代の美少女」「第三の性別”秀吉”」と称される程の美貌の持ち主だが、れつきとした男性である。・・・多分。

霧島翔子  
きりしましようこ

文月学園2年Aクラスの代表で学年首席。

長い黒髪が印象的な美少女で、男女問わず人気がある。しかし、男子からの告白は全て断つており、同性愛者ではないかとの噂が立つていたが・・・。

工藤愛子  
くどう あいこ

文月学園2年Aクラス。

ベリー・ショートでボーグイッシュな姿の女の子。

保健体育を得意としており、『実践派』を自称している。

久保利光  
くぼ としみつ

文月学園2年Aクラスの学年次席。

メガネをかけた、典型的なガリ勉男子の風貌である  
だが、彼にも秘密があるようで・・・。

清水美春  
しみず みはる

文月学園2年Dクラス。

縦ロールをツインテールにしている筋金入りの同性愛者。  
盗撮や盗聴が得意。

## 光坂高校編 第1話「バイク女とヒートテラ女」

問・『女性は（ ）を迎えることで第一次性徴期になり、特有の体つきになり始める。』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

『正解です。』

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

『随分と急な話ですね。』

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことと月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するころに初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される。』

教師のコメント

『詳しそぎです。』

桐山樹の答え

『脱皮』

教師のコメント

『あなたは女性を何だと思っているのですか？』

朝、目覚まし時計の音で起きる。時刻は7時。  
今日は土曜だというのに、こんなに早く起きたのは『試召戦争』があるからだ。

優希にテスト勉強を教えてもらい、文月学園の他校と変わっているテストもよく解けた・・・と思う・・・多分。何が変わっているかと云うと、文月学園のテストは通常のテストと異なり点数上限が存在せず、時間内であれば無制限に問題を解くことができる、というものである。

また1教科につき400点以上取れば、『腕輪』がつき、特殊能力を使えるといつ。

俺は1回も使ったことが無いが。

朝飯も食べ、制服に着替えて、家を出る。

「おはよ。」

「おはよう、樹。」

いつものように、家の前には優希の姿があった。

「今日の『試召戦争』頑張るうな。」

「頑張るのは、樹よ。私は、これでも学年首席、『観察処分者』の樹に心配されたくないわ。」

「悪い。」

「でも・・・ありがとう。」

頬を赤く染め、優希が言った。

照れくさくなり、俺は頭をポリポリと搔く。

その時、

「危ない、退いて、退いて――――！」

女性の叫び声が聞こえ、後ろを振り向くと、バイクが迫ってきていた。

ドシャアアアアン！！

「ぐへつ・・・・。」

そのまま、バイクは俺に当たり、道路に放り出される。

倒れている俺の頬を指でツンツンと突いてくる。

「死んだわね。」

「いや、死んでねえーし。」

ぼそりと呟いた優希は、俺が起き上ると、何だ生きてたの、はあと溜め息をつきやがった。

「ごめん、大丈夫？」

そこには、見慣れない制服を着た1人の女が尻餅をついていた。ヘルメットをしていることからバイクの持ち主であることは間違いないだろう。

「ああ、平気だ。」

不幸中の幸いと言つべきか、俺は少しのかすり傷はあるものの、骨折などの大きな怪我はしていなかつた。

「そ、それは良かつたわ・・・・。」

ホツと胸をなでおろす女。

「本当にごめんね。」

そう言って、再びバイクに乗ると、どこかへ行つてしまつた。

「朝からバイクに跳ねられるなんて、ついてねえ。」

「樹はいつも不幸のどん底にいるから、それが当たり前じゃないの？」

優希、いつもとはなんだ。失礼な。命の危機に瀕することなんて、そんなに経験して・・・（日本刀片手に襲つてくる優希の姿）・・・るな。

「そんなことより、早く行かないと。」

再び歩き出そうとする後ろから、誰かに制服の裾を引っ張られた。後ろを振り返ると、小柄で大人しそうな、さつきのバイク女と同じ制服を着た少女が、包帯を巻いた手で彫刻を握つて、こちらに見せていた。

「くれるのか？」

「クリと頷く少女。その少女から彫刻を受け取つた。  
これは星だよな？」

「可愛いヒトデだわね。」

優希が横から俺がもらつた彫刻を見て言つ。

「星じゃないのか？」

「ヒトデです。風子が彫つたヒトデです。どうですか？」

風子が顔を近づけてくる。

「星にしか見えん。」

「最悪です。」

ブイッと横を向いて拗ねている少女。

「その・・・。」

少し間をおいて、恥ずかしがりながらもはつきりと、

「それがあなたはもらつたので風子のお姉ちゃんのお祝いをしてく

ださい。」

と言い残し、風子と乗った少女は立ち去ってしまった。

「今日は朝からやけに騒がしいな。」

「樹が変なものでも引き寄せてるんじゃないの？類は友を呼ぶっていつじゃない。」

「あんな訳分からんやつと一緒にするな。」

「そんなことより早く行こいつ！――」

優希が歩き出す。優希の後を追つよひよひ俺も歩き出した。

光坂高校編 第1話「バイク女とヒトテ女」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## 光坂高校編 第2話「試召戦争開始」

「野郎ども、よく聞け！！これより俺たちは光坂高校と『試召戦争』を行う。よつて、今回の作戦を発表する。」

Fクラスの教壇に立つて、坂本先輩が言った。

今回の文用学園での『試召戦争』の会場は、文用学園の新校舎と旧校舎の2階を使って行われる。

俺たちの拠点はFクラス。他校の拠点はCクラスと言つことになっている。

「今回の作戦はこの間やつたDクラス戦（原作の4巻参照）同様に主要防衛ポイントは渡り廊下になるだろ。」

その言葉を聴いた吉井先輩の体がビクッと震えたが何かあつたのだろうか？

何故か清水さんは、吉井先輩を嘲笑つていた。島田先輩に抱きつきながら。

「そこで渡り廊下には、島田・清水・木下・久保の4名とFクラスから15名ほどで殲滅、いや時間稼ぎを頼む。」

坂本先輩の言葉に名前を言われた数名が頷く。

「拠点にはテストの点で、下位5名は補充を受けてもらひ。防衛戦力として俺と翔子とFクラスから8名ほどが残る。」

「工藤とムツツリーは空き教室で情報工作をやってもらいたい。今日は生憎、保健体育の大島は遅れて来るらしいからな。来ても、おそらく30分後だろ。そこで、工藤たちには、大島が来次第、渡り廊下に行つて戦つてもらひ。」

坂本先輩が2人に言った。

「・・・（「クリ）」

「まかしといてよ。」

「次に別部隊として、吉井、姫路、桐山、春風の4人と、残りの奴らは階段で一階におり、新校舎の階段から2階に上がって、Aクラスに侵入して、身を潜めていてくれ。」

「雄二、身を潜める意味があるの？」

「それに、わざわざ別部隊なんて作らずに、渡り廊下を正面突破すれば良いと思うんだけど。」

吉井先輩は疑問に思つた様で聞き、優希は怪訝な表情を浮かべて言った。

「正面突破は余り上策とはいえないな。敵の戦力が未知数な以上、一気に全滅つて可能性もある。それより、別部隊による時間差攻撃、それが不可能でも、相手の拠点の側に味方がいるつてのは士気の上昇にも繋がる。」

「そういう見方もあるわね。」

納得した御様子の優希。

「後は各自、全力で戦ってくれ。」

そして、『試召戦争』が始まった。

今回は敵チームの代表を討ち取れば勝ちとなるルールである。文月学園の代表は、坂本先輩になり、光坂高校の代表は古川渚ふるかわなぎやという女生徒だという。

その2人を倒すべく、各場所では激しい戦いが行われていた。

渡り廊下

「先生、召喚許可を。」

数学担当の船越先生を引き連れた光坂高校の生徒達。婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫るようになったと噂される先生である。

「許可します。」

勝負を挑まれた以上は召喚獣を喚び出さないと戦闘放棄とみなされ戦死扱いとなる。

「俺が行く。」

「福村、俺たちの力を見せてやれ！！」

「『試験召喚！』」

光坂高校の生徒と福村の声が重なる。

それぞれの足元に幾何学的な魔方陣が出現する。その中から自身の姿をデフォルメした姿の小さな召喚獣が現れた。

『文月学園 福村幸平 数学 27点 vs 光坂高校 野中麻紀 数学 123点』

「もう駄目だ・・・。」

落胆する福村。そんな彼の召喚獣に刀で切りかかる野中さんの召喚獣。

無抵抗のままやられる福村の召喚獣。

「福村幸平、戦死。」

戦死報告が入った。

補修室へと連れて行かれる福村を尻日に戦いはさらに過激になつていく。

1階

「僕達もそろそろいこうつか?」

「はい、明久君。」

渡り廊下で激戦が繰り広げられている頃、俺たちは動き出した。

目指す先はAクラス。

ゆっくりと進んでいく。

だが俺たちの目の前に、3つの影が現れた。

光坂高校編 第2話「試召戦争開始」（後書き）

いかがでしたか？

テストがあるので暫く更新できなくなると思います。

## 光坂高校編 第3話「金髪少年の暴走」

問、以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『?脂質 ?炭水化物 ?タンパク質 ?ビタミン ?ミネラル』

教師のコメント

『流石は姫路さん。優秀ですね。』

吉井明久の答え

『?砂糖 ?塩 ?水道水 ?雨水 ?湧き水』

教師のコメント

『それで生きていけるのは君だけです。』

土屋康太の答え

『初潮年齢が10歳未満の時は早発月経といつ。また、15歳になつても初潮がない時を遅発月経、さらに18歳になつても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

『保健体育のテストは1時間前に終わりました。』

春風優希の答え

『?飴 ?ケーキ ?チョコ ?ジュース ?キャラメル』

教師のコメント

『甘いものばかりですね。春風さんはよっぽどの甘党なんですかね。』

「あれ、朋也、こちには敵がないはずじゃなかつたの？」

長い髪の毛の女性が言つた。あ、今朝のバイク女だ。

「そんなこと言われてもな。」

バイク女に返事を返したのは、見た目かっこいい青年だ。

「お姉ちゃん、向こうも同じことを考えていたと思うよ・・・」

その青年とバイク女の間にいた、少し大人しそうだが可愛らしい女の子が言つた。

「どうすんの？樹。」

俺の隣にいた優希が言つてくる。

今回の俺たちの目的は敵拠点のこクラスの隣の教室、Aクラスへの侵入である。

そのために俺たちは階段を下りた別ルートからAクラスを目指していた。

そこに、敵の出現である。こういつた場合こは、戦わずに行け、もしくは何名かを囮にして先に進むようこ、坂本先輩に言つてはいた。

「こひは戦うか？」

「何言つてゐるのよ。向こうは大勢いるのよ。勝ち田は無いじゃない。」

「それに私達の目的は、まだ戦うことじゃないです・・・」

「そうだったな。ことみの準備がまだ整つていしないしな。」

向こうは何やら、俺たちと戦つつもりは無いらしい。

「坂本先輩に言われたとおり、先を急げ。向こうも、戦つつもりは無いらしいようだしな。」

俺が優希へ言つ。その意見に優希、姫路先輩、吉井先輩たちも賛成のようだ。

動こうとしたその時、

「岡崎、助けに来たぞ。」

バイク女達の後ろから、少年の声が聞こえてきた。

その場にいた全員の視線が集まる。

そこには、金髪で少し童顔の少年がいた。

「春原、何しに来た？」

朋也と呼ばれていた青年が、少年に言った。

「何しに来た？じゃないだろ、岡崎。様子を見にきたり『ビビッて戦おうともしないなんて僕は失望したよ。』」

額に手を当てて、ため息をつく春原と呼ばれた少年。

「そういうことだから、僕が昔の岡崎を取り戻してやる。」

「俺は今も昔も一緒だが……。」

「先生、召喚許可を。試験召喚！」サモン

高らかに響く、春原と呼ばれた少年の召喚の合言葉。

足元に幾何学的な模様が浮かび上がり、そこから召喚獣が出てきた。改造学ランを着ていて、手には何も持っていない。

「あれって素手……？」

「素手の召喚獣なんて始めてみたよ。雄一のでさえメリケンサックがついてるのに……。」

「あの人はきっと馬鹿なのよ。」

驚きの声を上げる俺と吉井先輩。その隣では優希が哀れみの眼を向けていた。

「確かに春原は馬鹿だ。」

うんうんとうなずく、青年とバイク女。そんな一人の行動におろおろし始める大人しそうな女の子。

「そこ、馬鹿って言うな！ 日に物見せてやる。誰だ？ 僕の相手になるのは？」

「私が相手します。」

そう言つたのは姫路先輩だ。

# 「試験召喚！」 サモン

姫路先輩の召喚獣が現れる。

今回の先生は化学の布施先生である。  
ひめじ みずき

『文月学園 化学 8点』  
姫路瑞希 ひめじみすき  
化学 457点 V.S 光坂高校  
春原陽平 すのはらようへい

「反則じゃないっすかあああーーー！」

卷之三

勝負がつくと同時に、『鉄人』と先輩がたから恐れられている西村先生がやってきて、金髪少年を片手で抱えると補習室へ連れて行つた。

暫くすると金髪少年の叫び声が聞こえてきた。

「あの馬鹿がすまなかつた。お互に戦うつもつは無いよつだからこゝは見逃してもいえないか?」

「いいわ。」

青年の提案を快く受け入れる優希。

その後、軽く自己紹介をしてその場を後にした。

青年の名は岡崎朋也。

バイク女は藤林杏。  
ふじばやりよ

大人しそうな子は藤林椋<sup>ふじばやしりょう</sup>という。藤林杏は彼女の双子の姉だという。

そして、階段付近にやってきた。

光坂高校編 第3話「金髪少年の暴走」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## 光坂高校編 第4話「作戦開始」

渡り廊下

最も激しい戦いが行われている渡り廊下で生徒達の悲鳴が起き始めた。

「なんだ、この女！？」

「強すぎる・・・。」

「こんなのはAクラス並みじやねえか！？」

そんな悲鳴を上げている生徒、文月学園のFクラスの面々が見つめる先には一人の女生徒がいた。

その美少女は、光坂学園の制服を着ている。周りの光坂高校の生徒は後ろに下がり、救世主を見るような目で見ている。

「お前達、全員相手にするのは面倒だ・・・。早く負けを認めてくれると嬉しいのだが・・・。」

「うるせえ。試獣召喚！」サモン

「やれやれ、仕方が無い。試獣召喚。」サモン

召喚獣が出てくる。

女生徒の召喚獣は女騎士を思わせるような格好で、手には双剣を持っている。

対する男子生徒、もとい近藤吉宗の召喚獣は改造学ランに弓矢というなんとも弱そうな装備である。

『光坂高校 坂上智代 数学 437点 VS 文月学園 近藤吉宗 数学 34点』

圧倒的な戦力の前に一瞬で切り刻まれる近藤の召喚獣。

「僕が行こう。」

そんな光景を見て一人の男が坂上の前に立ちはだかつた。  
文月学園Aクラスであり、学年次席の少年、久保利光だ。

「次は君が相手か・・・。無駄な戦いは避けたいのだが・・・。  
「無駄ではないよ。君達をここで足止めすることは僕にとっては必  
要だからね。」

眼鏡を上げて言う久保。

「なんだか気合が入っているわね。」

「そりやそうじやろ。アキちゃんのセーラー服バージョンの写真が  
かかつておるからのお〜。」

「木下、それどういふこと?」

「島田は雄一から聞かせておらぬのか?」

周りでは秀吉と島田が周囲の敵と交戦しながら話していた。

## Aクラス

「何とかここまで来れましたね。」

「後は雄一からの合図を待つだけなんだけど。」

光坂高校の生徒、岡崎達と別れた後、数人の光坂高校の生徒と出会  
つてしまい、何とかAクラスまで来たものの残りのメンバーは俺と  
優希、吉井先輩、姫路先輩の4人のみとなっていた。

「それにしても合図はまだなのかしら?」

「ゆつちゃん、落ち着いて。坂本君にも考えがあると思います。」  
イライラしている優希を落ち着かせる姫路先輩。

そして時間が立ち、Cクラスから数名出てきた。

「一ノ瀬さんこっちです。」

「分かったの。」

数名の女生徒に、文化部っぽいオーラを出している女の子が連れられていた。

## 空き教室

空き教室に待機しているムツツリーと工藤さんは誰かと話していた。

「・・・敵に動きがある。」

「一ノ瀬つて子が出てきたみたいだよ。胸が大きいよ。」

「・・・他にも侵入者がいる。」

「3人光坂高校の生徒がいるみたいだね。こっちも可愛いよ。」  
盗聴やら情報工作をやっていた彼ら。ムツツリーは冷静に、工藤さんは笑いながら情報を伝えていた。

『そろそろ例の音楽を流してもらいたい。それともうじき保健の撃退を頼む。』  
「・・・了解。」  
「任しといて。」  
「通信が切れる。」

「ねえ、ムツツリーー君。」

「・・・何だ？」

「あの子達可愛いよね。興奮してるでしょ？」

「・・・っつー！」

ブンブンと首を横に振るムツツリー。それを笑いながら見ている工藤。

「・・・そんなことより、音楽。」

「あの一ノ瀬つて子、胸が大きかつたよね。水着とか凄いんだろうなあー。」

「・・・っつー！」

妄想したのか工藤の言葉に鼻血を噴出すムツツリー。

「ムツツリー君は分かりやすいなあ。」

「・・・音楽。」

ムツツリーは放送室へ向かい、一枚のCDをいれた。

## Fクラス

「ああ、作戦の開始だー！」

雄一のつぶやきと共に、スピーカーから音楽が流れた。  
その曲のタイトルは『だんご大家族』。

光坂高校編 第4話「作戦開始」（後書き）

いかがでしたか？  
次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5908m/>

---

バカとテストと天下統一

2010年10月10日11時52分発行